

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 17 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26780101

研究課題名(和文) 誤認知と不信再生 日中相互不信の再生産のメカニズムに関する理論的・実証的研究

研究課題名(英文) Misperception and the Replication of Mistrust: A Theoretical and Empirical Research on the Mechanism of the Replication of Sino-Japanese Mistrust

研究代表者

張 雲 (ZHANG, YUN)

新潟大学・経営戦略本部・准教授

研究者番号：70447613

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：日中の相互不信の克服が急務である。本研究は国際関係論の「認知」(perception)と「誤認知」(misperception)の理論から、理論分析枠組みを構築し、それを「日中3.11災害外交」を実証研究のケースとして日中双方はいかに当初の「善意的なイニシアチブ」から最終的には「不信の再生産」にまで発展したかについてのプロセスを追跡し、日中関係における不本意の相互不信再生産のメカニズムを解明した。

研究成果の概要(英文)：Both China and Japan have showed their intentions and efforts for building mutual trust, but the mutual mistrust has deepened. Why did this seemingly abnormal situation happen? The representative case is the failure of the 3.11 disaster diplomacy between China and Japan. A theoretical and empirical nexus approach is employed to answer the aforementioned puzzle. This research firstly introduces the theories of misperception in international relations and presents the theoretical basis of the tragic replication of misperception and mistrust. Then it uses the failure of Sino-Japanese disaster diplomacy with the 3.11 Great East Japan Earthquake as a case example showing that even the initial gestures of goodwill could be distorted by the biased perceptual lens to produce even more mistrust.

研究分野：国際関係論

キーワード：日中関係 誤認知 国際関係理論 3.11災害外交 相互不信 東日本大震災

1. 研究開始当初の背景

(1) 日中の相互信頼が著しく欠如していることは異論がないだろう。日中関係の相互不信をめぐって、数多くの研究が行われている。しかし、主には日中それぞれの立場から自分の論理を強調したり、あるいは日中関係の特殊性に焦点を当てたりすることが多い。現実としては日中双方とも信頼醸成に意欲を見せ努力しているのに、逆に相互不信が深まっている。特に、二〇〇九 二〇一二年、日本の民主党政権においてアジア重視の姿勢が見られ、歴史問題をめぐり摩擦がいくぶん解消される一方で、中国では胡錦濤・温家宝政権が引き続き日本を重視する望ましい政治環境を形成していたにも関わらず、日中関係は最悪の事態に陥った。典型的な事例は日中「三・一一災害外交」の失敗である。日中双方とも災害外交 (disaster diplomacy) を通じ関係改善の意欲と努力があったのにも関わらず、結果として相互不信は再生産された。それに踏まえ、日中関係の特殊性に立脚する研究だけでは極めて不十分で、より普遍的、理論的な視点からの分析が必要である。

(2) 2009 年から、本研究の研究代表者は「日米中関係における日中の東アジア地域主義政策の研究」に従事し、相手に対する「認知」あるいは「誤認知」が外交政策プロセスに大きな影響を与えたことを明らかにした。(Zhang 2014) その後、研究代表者は「日本とアメリカのインテリ層の中国台頭への認知」の研究を立ち上げ、「認知」と「政策」との緊密な関連性を重点的に研究してきた。このような背景のもと、申請者は「認知」、「誤認知」の理論的な枠組みを用いて、日中関係の相互不信の再生産を分析することに至った。

2. 研究の目的

(1) 本研究では国際関係論の認知の理論を用いて、「誤認知」と「相互不信」分析枠組みを構築し、日中相互不信の不本意な再生産メカニ

ズムを解析する。さらにこの枠組みを用いて、「三・一一災害外交」を実証研究のケースとして日中双方はいかに当初の「善意的なイニシアチブ」から最終的には「不信の再生産」にまで発展したかについてのプロセスを解明する。

(2) 具体的な目的

日中双方とも関係改善に意欲と努力を重ねたことにも関わらず負の方向に向かう一途をたどるといふ不本意の相互不信再生産の過程を解析する。「日中 3.11 災害外交」の失敗を「誤認知」を軸で徹底的に調査・解明する。日中関係の実証研究により、国際関係論の「誤認知」の理論枠組みの充実を図り、「誤認知」と「相互不信」との理論的な関連性を構築する。

3. 研究の方法

本研究は従来の日中相互不信に関する研究における二国間の特殊性を強調する視点から一線を描く。世界でも例に見ない高い相互依存を持ち、関係改善に意欲を見せる日本と中国において逆に相互不信が再生産されるという矛盾する現象のパズルを国際関係理論と実証研究を融合した視点から分析を行う。

(1) 理論研究：国際関係理論にある「認知」(perception) と「信頼」(trust) についての豊富な既存の研究を全面的に検証する。「誤認知」と「相互不信」の関連性を念頭に全体の分析枠組みを試験的に構築する。

(2) 実証研究：日中の 2010 年に相互主流認知の負の方向への変化に着目し、両国のインテリア、実務家、オピニオン・リーダーの論文、発言、論調を 2010 年前後中心に徹底的に比較検証する。双方の相互認知の変化とそして負の「誤認知」の形成を明らか

にする。東日本大震災における災害外交の実例に関しては、日本語、中国語、英語での関連する書籍、論文、新聞、雑誌の文献収集し分析する。また、日本と中国での「災害外交」に携わった関係者などへの聞き取り調査を精力的に実施する。

4. 研究成果

(1) 日中は、互いに相手に対する信頼構築に向けた反応を、合理的な範囲内での期待に留める必要がある。また、自身の期待が満たされない時に、負の既存認知が新旧の情報に関わらず、相手からの反応の情報を無意識に編集して既存認知に合わせることが、十分有り得るということを知るべきであろう。震災外交の事例に見られるように、日中は互いに過剰な期待を掛け、またこの主観的な期待を客観的な信頼意図の尺度として用いた結果、誤認知と不信の再生産が生じた。(図1)

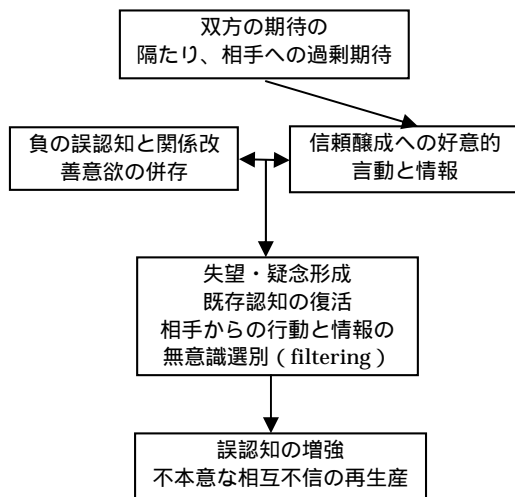


図1 日中相互不信の不本意な再生産メカニズム

(2) 第二に、新しい相互認知のプロセスを不成熟に終了すること (premature cognitive closure) は誤認知と相互不信の増

幅に繋がる。二〇一一年の災害外交は非常に短い期間で失敗に終わってしまった。つまり、日中ともに協力の「互恵性」の確認が重要であるのに、その確認プロセスのための相互認知の努力に短期間で終止符を打ったということの意味する。一回、二回だけで相手の意図、そして相互作用の「互恵性」を確定できるだろうという短絡的な考えでは協力関係が生まれない。自身の期待が満たされない時にすぐにこれは一方的な協力であり、相手がこの協力から逆に利益を搾取していると考えたら、新しい認知形成のプロセスを自ら断つことになる。従って、日中間は地道な信頼醸成に向け複数回の試しゲームを展開しなければならないのである。

(3) 日中双方において信頼醸成のための有効かつ迅速なコミュニケーションが不可欠である。病院船、医療チームの派遣の事例からは、信頼醸成のシグナリングの事前意思疎通が欠けていたことが分かる。また、物資輸送手段、感謝文の掲載、原子力事故の情報不足などの事例のように相手との間で疑念発生時の迅速な修復コミュニケーションも見られなかった。

(4) 日中の政治文化の違いもあり、期待外れのことは意識的に留意することが必要である。医療チームの派遣の例に見られたように、中国はトップダウンで救援の受け入れが迅速にできる一方で、日本は中央と地方、省庁間の調整型の政治文化があり、このズレにより互いの誤認知に繋がったのである。日中関係は決して宿命論のような永遠な対立を信じず、まず本稿のような無意識、不本意な誤認知の再生産を止め、忍耐を持って多層的かつ持続的な信頼醸成の地道な努力により正常な日中関係ができると信じたい。

<引用文献>

Yun Zhang, Multilateral Means for Bilateral ends: Japan, Regionalism, and China-Japan-US Trilateral Dynamics, *The Pacific Review*, Vol.27, No.1, March 2014, pp.5-25.

5 . 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

張雲、「日中の誤認知と相互不信の再生産のメカニズム 日中「三・一一災害外交」の失敗をケースに」、『国際政治』第184号 『国際政治研究の先端13』、有斐閣、2016年4月、第1-15頁。(査読あり)

張雲「日本の対中認知與対中政策中的美国因素」(中国語)、『社会科学』、2015年第10号、13-21頁。(査読あり)

Yun Zhang, China's Economic Statecraft and the *Diaoyu/Senkaku* Dispute: The Case of the Restrictions on Rare Earth Exports to Japan in the China-Japan-US Trilateral Context, *Harvard Asia Quarterly*, Vol.16 No.1, pp: 36-45, July 2014. (査読あり)

Yun Zhang, The *Diaoyu/Senkaku* Dispute in the Context of China-U.S.-Japan Trilateral Dynamics, *S. Rajaratnam School of International Studies Working Paper*, Nanyang Technological University, No. 270, March 19, 2014, pp:1-9. (査読あり)

[学会発表](計2件)

Zhang Yun, *Co-constructing East Asian International Order and China-Japan-US Trilateral Relations*, Beijing Forum 2015, Peking University, Beijing, November 7 2015.

Zhang Yun, *Nationalism in Sino-Japanese Relations: Domestic Legitimacy and International Behavior*, International Conference on Nationalism in Asia and Europe,

Konrad-Adenauer-Stiftung (KAS) and East Asian Institute, National University of Singapore, Singapore, 7 May, 2015.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

張 雲 (Zhang, Yun)
新潟大学・経営戦略本部 准教授

研究者番号 : 70447613